

タコノアシ *Penthorum chinense* の群落

中山 洸

K. Nakayama : *Penthorum chinense* community

タコノアシは、その形態から命名されたものと思われるが、分類学的には所属のはっきりしない不可解な植物の一つである。今までベンケイソウ科に属していたが、近年の研究からユキノシタ科に分類される説が支持されている。(日本の野生植物Ⅱ 1982)

また、タコノアシ科として独立させる説もある。このタコノアシについては、1965年更埴地方誌の調査の折、千曲河原で2個体ほどを見たのみで、その後は全く見る機会がなかった。

m位に茂る中で外からは全くみえず草原の中を歩いていて偶然に行きあたったという感じであった。5本のうちの2本は70~80cm、残りは30~40cmのものであった。その後1987年8月には、調査員の花里弘先生と同行し、健在であることを確認し、佐久市誌の自然編へは写真をつけ報告した。

1988年10月に再び行ってみると、2本ほど健在であったが、他はみられなかった。70cmと30cmの2本であった。何とか保護したいものだと思いながら、



図1 タコノアシの群落 (1988. 10. 10)



図2 タコノアシの花 (1987. 8)

横内斉氏の「長野県の植物1971」には、タコノアシ科として、下水内、上水内、東筑摩、下伊那などに分布すると記されているが、今回の長野県植物誌調査資料にはどこの地区からも記載がなく、従って標本も見当らなかった。

ところが、1986年8月、佐久市の東村誌の調査の折、香坂ダムの一角で5個体ほどのタコノアシの生育を確認した。場所はダムの周辺部のツルヨシが2

他にないものかと草やぶをかき分けて東の方へ10mほど探すと、赤い茎のタコノアシが、群落となって生育しているのが目に入った。すでに花は終わり実をつけていた。喜び勇んで数えてみると80本ほどあった。広がり4m×4m位である。周辺はヤナギ類で被われた平坦地で、砂礫地の土壌であり、現在のはかなり乾燥しているが、以前は水が流れたであろうと思われるような環境である。大きなものは1本

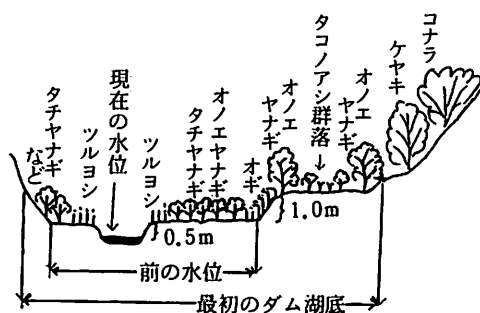


図3 ダム内のタコノアシ分布位置図

もなく、30~40cmの個体と20~30cmの個体が半分位ずつ入りまじっていた。また、走出枝を出して繁殖するためであろうか、3本、4本、6本、7本とかたまりを作って生育しているのが観察された。

図鑑によると、タコノアシは泥湿地、沼、川原などの水位の変動する場所に生育地をもつとなっているが、香坂ダムのこのあたりは水位がかなり下がってしまい、現在はヤナギ類の2~3mとなった群落

に囲まれているので、次第に乾燥化し、タコノアシの生育地としての環境がなくなるのではないかと心配である。

タコノアシ生育地の群落組成

場所	佐久市香坂ダム	標高 800 m
調査	1988年10月10日	
低木層	高さ 1.5 m	植被率50%
	タチヤナギ (2.3)	オノエヤナギ (2.2)
	イヌコリヤナギ(+2)	ツルヨシ (1.1)
	ヒメジョオン(+2)	
草本層	高さ 0.7 m	植被率70%
	ツルヨシ (2.3)	タコノアシ (2.2)
	ヨモギ (1.2)	オオバコ (1.2)
	スギナ (1.2)	イヌコリヤナギ (1.2)
	ヒメジョオン(+2)	コシオガマ (+2)
	ヒメクグ (+2)	アカツメクサ (+2)
	トモエソウ (+)	ヒメジソ (+)
	アシボソ (+)	オオブタクサ(+)
	キンエノコロ(+)	ネコヤナギ (+)
	ハルジオン (+)	ヤマシロギク(+)

〔新刊紹介〕信州大学教養部生命論講座編「いま生命を語る」B6判、417頁、共立出版、1988年12月1日発行、2,700円。

信州大学教養部では講座の出版が盛んである。すでに「自然保護を考える」「続自然保護を考える」「自然との共存」「続自然との共存」「自然と結び文化」の5冊を世に問い、本書は6冊目の出版である。現代の急速な生命科学の発展は基礎的科学分野にとどまらず、いわゆるバイオテックとして応用面でも著しい進歩をとげつつある。それに伴い、遺伝子操作とその安全性、臓器移植と脳死、植物人間、尊厳死、試験管ベビー、代理母など生と死をめぐる社会的問題を惹起するに至っている。信州大学教養部、医学部、農学部などの多数の研究者による哲学・宗教学法から最近のバイオテクノロジーまでの幅広い内容となっている本書の出版はまさに時宜を得たものといえよう。以下に各章のタイトルを紹介する。生命をどう観るか I 生命の起源を探る II 化学からみた生命 III 物理学からみた生命 IV 多様な生命のいとなみ V 遺伝子を操作する VI 生物をつくり変える VII 家畜のバイオテクノロジー VIII ヒトの生 IX 病変をみる X 老化とは XI 老化を防ぐ XII ヒトの死 XIII 法の扱う生命 XIV 宗教にみる死生観 XV 人はなぜ死ぬか (K. S.)

〔新刊紹介〕佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 編「日本の野生植物 木本Ⅰ」B5判、321頁、写真304頁「同 木本Ⅱ」305頁、写真288頁、平凡社、各定価18,000円(特別定価16,800円)、1989年2月。

厳選された多くの写真と検索もできる記述で好評の「草本編」に続いて、完成が待たれていた「木本編」が、遂に発刊された。7年も待たされたが、その内容は期待以上のものになって我々に提供されることになった。検索表、記述は、前編通り。本編では更に、頁数で予想されるだろうが、豊富で、完璧なまでのカラー写真に驚かされる。1種について、花・樹皮・果実・樹形等々、少なくとも3枚以上の写真が載せられ、思わず感心させられ、この発刊に対するご苦労にまで思いが及んでしまう。まさに微に入り細をうがう、価値のある植物誌である。本書には、本会名誉会長清水建美先生を始め、多くの会員が参加協力している。この点からもまた、自信を持って、喜んで推薦できるのである。「木本」も同様に、フィールド版が待たれるが野に出なくとも、これだけの詳細な資料を手にし、頁を開くことは、本当に楽しいことでもある。 (S. T.)